

自分と社会の関わり方を探る

人文学部 有田悠樹くん（平成 25 年 3 月卒業）

★「え・・・人間ボーリングっておもしろくない？」

2009 年夏。高知大学内の 1 室で、僕と足達と松平の 3 人はあるイベントを企画した。制作期間 2 週間。これはいかにもバカなタイトルでまとまったイベントだけど、未知の世界に飛び込み新たな何かを見つけようと歩んできた僕の大学生生活の原点となる話だ。

僕たち 3 人は、商店街で催される祭りでイベントを企画・運営する「地域協働入門」という科目の履修生だった。グループになった僕たちは 1 ヶ月間で企画を考え、商店街関係者への企画提案と当日の準備を進めていかなければならなかった。

最初は、商店街の方からの「大人が考えつかんことをして欲しい」という言葉に悩まされた。パッと思いついたものは全てありきたりに感じてしまう。一度目に提案した企画案は、商店街という環境で実施が難しいうえに、「おもしろくない」という理由であっさり却下されてしまった。僕たちは、あらためて黒板に思いつきで書いた 50 ほどのキーワードを眺めて話し合った。「やっぱり、俺らバカやから体を使ってできる方が・・・」と言いながら、「ダンス・・・ポールダンス・・・早食い競争・・・運動会・・・玉転がし・・・ボーリング」と連想ゲームのようにつぶやき続ける。そのとき、松平がポツリと言った。「人間ボーリング・・・」。「人間ボーリング!!! それや!!!」。3 人が一斉にワクワク感に包まれたこの企画は、商店街の方からもタイトルだけで大絶賛だった。しかし、再提案までに時間を使ってしまい、残された時間は 2 週間しかなかったため急いで準備にとりかかった。

企画名は決まっても実現するまでが難しい。最初はピンを全て人間だと想定したが、倒れ方次第で怪我人を出すかもしれない。かといって、危なくないように倒れてもわざとらしい。考え抜いた結果、1 人が人間であとは巨大なピンを作ることにした。時間も 1 週間で切り焦りはあったけど、ここで 3 人のチームワークと適材適所が発揮された。

松平は理学部生でチームの頭脳となり、いつのまにかピンの組み立て方を考案していた。足達は持ち前のフットワークで、手作りピンの材料である段ボールや、ガムテープなどの備品の調達をした。僕はネットワークを活かし、制作や当日スタッフに協力してくれる友人を集め、運動会用の大玉を母校の小学校に借りる交渉を行った。こうして、みんなの長所を活かし、わずかな期間で全て手作りの巨大ピン 5 本と人間ピン（コスチュームも段ボールで手作り）が完成した。

そして迎えた当日は、4時間のイベントで200組以上のご家族に楽しんでもらえた。また、多くの人からもらった笑顔と「ありがとう」は忘れられないものになった。シナリオのないものを自分たちで一から作り人が喜ぶ顔が見えるという経験は、高校生活での文化祭や体育祭には無かった刺激や感動があった。学校という壁の中で生きていては、そう感じることの無かった、深い達成感と人とのつながりがあったからだ。

僕たちはこの講義での体験をきっかけにして、商店街での活動を継続してきた。翌年は、後輩を巻き込み、2つの場所をお借りして複数のイベントを行った。講義は僕たちの年で終わっていたため、自分たちがパイプラインとなり、後輩に商店街への企画提案の機会を作り、自分たちもよりパワーアップした人間ボーリングを目指した。この年、僕たち初年度メンバーには新たな収穫があった。それは、前年の反省を活かしてより完成度の高いイベントを実施できただけでなく、後輩にも僕たちと同じ体験ができる場を用意したことで、この商店街イベント以外の活動にも挑戦しようとする学生が現れたことだ。ずっと何かを継続するには勇気が必要。しかし、1ヶ月だけのイベントづくりは学外に飛び出すよい機会になったという感想を後日、聞くことができた。



★「こういった場はもっと他にも必要だ」

こう感じた僕たちは、これ以外にもたくさんの学外活動をはじめのきっかけを作りたいと考え、コラボ考房プロジェクトに応募して大学の支援のもとで活動を改めてスタートした。その他でも、先生・先輩の紹介や講義の延長線上で地域のイベントに参加したり、興味のあるテーマの勉強会に参加したりした。そうして、学外活動などの自主活動をメインに僕の大学生活は進んでいった。そうすることで、多くの社会人・地域の方々・学生と交流する機会が増え、これまで知らなかった多くのことに出会えることができたからだ。

・・・とは言っても、僕はとっても飽き性だった。どれも単発的で1つのことを継続し

たことが少なかったため、活動自体の発展や深まりは薄いものだった。大きな失敗をしてたくさんの人に迷惑をかけたこともあった。だが、取り組んだ期間の長さに関わらず、人間ボーリングのように、1つの目標に対してやり抜いた経験はどれも心の中に残っているし、そこから学んだことも忘れることはない。

★僕は何を学んだか

では、そんな熱しやすく冷めやすい大学生をしてきて何を学んだか。

僕にとっての大学生生活の学びとは、「自分と社会との関わり方を探る」ことだと考えている。なぜなら、これが就職活動以降、具体的に将来を考えるために大きく役だったと感じたからだ。自分の意志ではじめたことだからアルバイトのシフトのように代役を立てることはできない、いわば“小さな社会的責任”を背負って挑戦した活動によって、自分のこれまで知らなかった社会（人・物・事）に出会うという経験をしてきた。これには、もちろん知識や技術的な学びも含まれるが、それはほんの小さなこと。根本は、例えば、社会に向かって何か挑戦してみたいと思える気持ちで、そのスタートは、動機はどうであれ自分と社会とが関わることに興味を持てることだと思う。

僕の数少ない「継続して何かを行った経験」として、「コラパ〜祭り」がある。これは地域の方々フィールドワークを行っている学生を大学に集め、一緒に地域産品などを販売していただき活動紹介や新たな学生と地域の出会いの場を作るため、年1回の大きなイベントを企画する活動だ。2012年で第3回を迎えたが、大学祭と同時開催しているもあり、毎年、多くの方々が集まる。

僕が大学2年のとき、大学主導でこの取り組みが発足したと同時に参加し、2年目には代表を務めた。それは様々な活動の中で多くの地域の方々との出会い、本気で地域を何とかしたいと立ち上がっている人や、地域の現状に嘆きながらも自分の使命を全うしている方々の存在を知っていたからだ。そして、代表としてどうチームをリードするのか、普段の会議の場をいかに楽しいものにするか、各メンバーの個性を生かすための適材適所とは何かということを考え続けた。

人間ボーリングやコラパ〜まつりは僕が“小さな社会的責任”を背負って挑戦した貴重な経験だ。これらの先にあったのは、重ねて言うが、「社会へ向けて挑戦するマインドを持つこと」や「自分の将来を真剣に考えようとする意識を持つこと」だ。これが、小さなことかもしれないが僕の大学生生活の成果だと思っている。僕にそのスタートを切らせてくれたのが、冒頭で紹介した人間ボーリングの活動だったのだ。

もし、学内だけで生活をしていたら社会と関わる機会はほとんど無く、就職活動がはじまるまで自分の将来を考えるようなことはなかっただろう。また、自ら挑戦するという姿

勢を持てなければ、今よりもっと知らないことだらけで大学生活を終えていたかもしれない。これはつまり、一度きりの自分の人生の選択肢を狭めることになったのではないだろうか。

社会人になってもこの考え方は変えたくない。常に自分が社会の中でどう生きるのかを探り、夢に挑戦し続けられる人生を歩みたい。